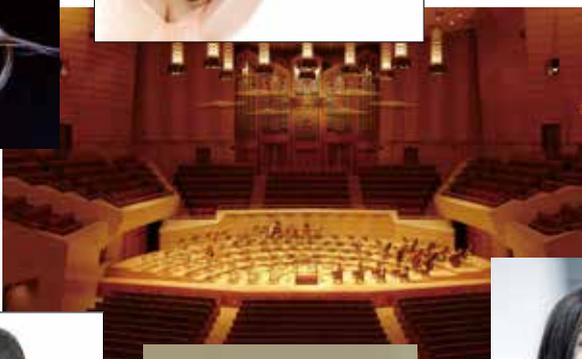


森山開次 ©石塚定人



板倉康明 © Eric MANAS



佐藤紀雄 © Akitoshi Higashi



小菅 優 © Marco Borggreve



サントリーホールで 新しい音にしばれる

一期一会の音楽体験！

開催期間

サントリー
ホール

8/22
(月)

8/30
(火)

チケット

PRESENT
読者プレゼント

⇒詳細はp.32

音楽にはいくつものたらきや用途がある。日々消費されるエンタテインメントが、鑑賞される古典があり、全身で「いま」を音で体験しようと試みる、生なアクチュアリティの「現代」作品がある。

文||小沼純一(音楽・文芸批評家)

公演 Pick up!

ザ・プロデューサー・シリーズ

佐藤紀雄がひらく

●〈単独者たちの王国〉めぐりあう声

8/22(月) 19:00 サントリーホール ブルーローズ
 曲目: デジャルダン/デ・ブレ (バスケス) [日本初演] / 死と願望の歌とダンス (ボディ) [改訂版世界初演]
 出演: メレ・ポイント、波多野睦美 (メゾ・ソプラノ) / シャオ・マ (カウンター・テナー) / 森山開次 (ダンス) / アンサンブル・ノマド 他
 自由一般 ¥4000 学生 ¥1000

●〈単独者たちの王国〉めぐりあう響き

8/27(土) 19:00 サントリーホール 大ホール
 曲目: ジバング (ヴィヴィエ) [日本初演] / 群鳥S (武満徹) / アジャスタブル・ランチ (トーキー) [日本初演] / ソシエテII (フェーリ) [日本初演]
 出演: 中川賢一 (ピアノ) / 吉原すみれ、加藤訓子、宮本典子 (打楽器) / アンサンブル・ノマド 他
 S ¥4000 A ¥3000 B ¥2000 学生 ¥1000
 ☆2公演セット券 [8/22 & 27] ¥6000 (限定50セット)

板倉康明がひらく

●〈耳の愉しみ〉スバラシイ・演奏

8/25(木) 19:00 サントリーホール ブルーローズ
 曲目: デリーヴ1 (ブレース) / 7つの俳諧 (メシアン) / 6つの解釈 (カサブランカス) [日本初演] / ヴァイオリン協奏曲 (リゲティ)
 出演: 神尾真由子 (ヴァイオリン) / 東京シンフォニエッタ 他
 自由一般 ¥3000 学生 ¥1000

●〈耳の愉しみ〉ウツクシイ・音楽

8/29(月) 19:00 サントリーホール 大ホール
 曲目: 衝突 (マントヴァーニ) [世界初演] / ダーク・ドリームズ (ハース) [日本初演] / ピアノ協奏曲第2番 (リンドベルイ) / 海 (ドビュッシー)
 出演: 小菅 優 (ピアノ) / 東京都交響楽団 他
 S ¥4000 A ¥3000 B ¥2000 学生 ¥1000
 ☆2公演セット券 [8/25 & 29] ¥5000 (限定50セット)

お問合せ: 東京コンサーツ ☎ 03-3200-9755

詳細は

「瞬間」を感じよう

クラシックは歴史のなかで評価が定まったものでしょう? でも、現代の音楽って、まだ野とも山ともわからないものじゃない?

野とも山ともわからないからいいんだ。と、キャンブルまがいのことを言いかえす気はない。そうじゃなくて、クラシックも含め、多くの音楽は身をまかせればある一定時間、その音楽のストーリーに身をまかせていければいい。一方、その時間の持続より、瞬間瞬間の変化が求められる時代をこそ、いまの音楽は体現している、といえないか。あーと驚いたり、美や醜や「わからなさ」を感じるその瞬間が刻々と更新される。それこそが、「いま」なのではないか? 音楽ってこんなもの、じゃなくて、音と音が結びついて音楽にな

る、を体感させてくれるのが、いま、の音楽だ。そのあらかたを、たとえば佐藤紀雄は「めぐりあう」と、板倉康明は「スバラシイ/ウツクシイ」と表わす。ギターとクラリネットという楽器の名演奏家である二人がたてたテーマは、それぞれにわかりやすいながらも奥行きが深い。テーマはまた、演奏される作品によって照明をあてられ、疑問符をつけられ、新たなものとして捉えかえされるだろうから。

「いま」の音楽が、「いま」の生活に示唆を

演奏家の身近な姿を体感できるブルーローズ。「めぐりあう声」はタイトルどおり、声を含んだ21世紀の作品が、森山開次のダンスとあわせて、「スバラシイ・演奏」では

もはや古典と呼んでよいメシアン、リゲティ、ブルーローズの作品にふ

れられる。

大ホールでのコンサートは「めぐりあう響き」「ウツクシイ・音楽」ともに4曲。ただし後者のオーケストラに対し、前者は総勢で30人のコンパクトな編成。音楽II作品の質や演奏はもちろんだが、あわせて音楽作品と空間とのあり方、音の動きや変化、そして瞬間と持続とが聴いている身にどうはたらきかけてくるのかを体感したい。

音楽と呼んでいながら、奏者が発しているのはひとつひとつの音であり、一瞬の積分によってこそ刻々と生まれてゆくものだ。そのことをあらためて気づき、体感するためには、「いま」の音楽こそが絶好である。

それは、ひいては、わたしたちの生活や生き方、時間の過ごし方についても示唆を与えてくれるはず。

